日本社会の中での仏壇の役割

２０１5/5/15
西九州伝道所

佐々木正明

「仏壇は悪霊の棲家だから壊さなければならない」と、熱心に話す牧師に出会ったことがあります。「仏壇は偶像であるから、これは取り除かなければならない」と主張する、牧師の説教を聞いたこともあります。この人たちは、ただ異教は偶像礼拝の罪であると、単純に教え込まれたまま、真面目に聖書を読むこともなく、日本社会の歴史や構成についても考えたことがなかったです。

聖書によると、偶像礼拝が罪であることは確かです。しかしそれよりももっと先の罪は、神の戒めに背いてしまったことです。その結果、人間は神のみ前から追放されて、神のいない社会を作り上げました。自分中心で、時折、神を思い出したとしても、正しく礼拝も感謝もせず、どんどん神のことを忘れていく社会です。

創造主である神については、急速に記憶を失っていく社会の中でも、人間は宗教心という本能を失うことなく、神を礼拝したいという欲求を持ち続けました。そのために、かすかに残った創造主である神についての記憶を頼りに、自分なりの、想像上の神々を造って礼拝を始めたのです。神を礼拝したいという欲求自体は罪ではなく、人間として当然の事でした。ところが、礼拝する神のことが良く分からなくなってしまったために、偶像礼拝になったのです。

そのような人間社会の中から、神はイスラエルという民族を選び、この民族を通して、すべての人々を救いに導こうとされたのです。そこでまずしなければならなかったのは、この民族に正しい神信仰を教えることでした。神はまず、イスラエル民族に数々の奇跡を見せ、多くの力強いみ業を通してエジプトの奴隷状態から救い出し、神がお与えになると約束された土地に向けて、旅を続けるようにしてくださったのです。

その旅の途中でイスラエル民族を教え諭し、ご自分が彼らをエジプトの地、奴隷の状態から救い出した神なのだから、あなた方は私だけを神とし、私だけを礼拝し、他の神を礼拝してはならないと、お命じになったのです。そして、天地創造の物語を通して、ご自分

が他のあらゆる神々とは異なる、絶対の神、天地万物の創造主である事を教え、アブラハムの時代からイスラエルをお選びになっていた、「彼らの神」である事を示してくださったのです。

　ですから、偶像礼拝の罪には二重の意味があります。一つは、人間はみな罪人であると言う意味と同じで、神を離れた社会で生きる迷いの中にいる罪、真の神を知らないまま神を礼拝する罪です。もう一つは、真の神の自己啓示を見ていながら、つまり、奴隷の状態から開放され、救いのみ業を間違いようが無いほど明らかに見ていながら、その神に感謝もせず礼拝も捧げず、他の神々を慕うという罪です。同じ偶像礼拝の罪でも、ここには明白な違いがあるのです。

　聖書を読むとはっきり分かることですが、神はイスラエル民族の偶像礼拝には非常に厳しく、まさに燃え盛る火のような怒りの神として現れておられます。でも、イスラエル民族以外の偶像礼拝には、非常に寛容なのです。現在の多くの牧師や宣教師、そして彼らに教えられたクリスチャンたちの間違いは、日本人の偶像礼拝の罪を、第二の、イスラエル人の偶像礼拝の罪と同じように見てしまうことです。

　日本人は、奇跡の救いを体験したイスラエル民族ではありません。偶像礼拝は罪ですが、神の寛容なお取り扱いの中にある偶像礼拝です。日本人に必要なのは、偶像礼拝の罪を糾弾されることではなく、天地をお造りになった神をお教えられ、この神を礼拝することこそが、正しい神信仰であると伝えられることです。

　仏壇は、聖書の教えが日本に到来するずっと前から、日本人の生活に深く馴染んできた仏教という宗教の、一つの信仰表現です。わたしたちは仏教に本当の救いがあるとは思っていません。だからと言って、仏教が悪だとか罪だとか言う必要もありません。それは、本当の神の姿を見失った人間が、一所懸命になって捜し求めた信仰の形です。聖書の教えが日本に到来するまで、日本の社会の家族親族をまとめ、血族関係を中心に、日本社会を形成する大きな力となってきたものです。仏教が、日本の死者の葬りの大役を果たしてきた事実も、素直に認めましょう。それらを罪という言葉で退けるのは、あまりにも愚かです。仏壇には、確かにクリスチャンの嫌いな「抹香臭さ」が付いています。しかし、日本社会の要としての、大切な社会的役割も持っているのです。それを無視してはなりません。

　仏壇は、日本の家とイエ、つまり、現在の親族関係と、先祖との関係を結び合わせ、繋ぎ合わせる重要なものなのです。特に地方においては、日本人の多くは仏壇を中心にした仏事で、自分という人間が誰であるかを確認し、自分が単なる根無し草、どこの馬の骨かもわからない人間ではなく、社会の一員として親族を持ち、血族を持って生きているのだ

という、自覚を持つことができるのです。

仏壇の前に集まった人を見て、「あら！ あの方もうちの親戚？」「そうよ。おじいさんの弟の長男の嫁の・・・・・・・、なのよ」、「あちらの白髪の方は、おばあちゃんの妹さんのご主人で、市会議員をしていらっしゃるの」ということになります。そこで自分の社会的立場も明らかになり、自分が一人で生きているのではないと、改めて確認し、責任のある生き方をしようという、決意のきっかけにもなるのです。

現在の日本社会では、仏壇の役割はだんだん小さくなっています。とは言え、まだまだ大切な機能を果たしているのです。そのような中で、仏壇を壊せと教えたり、取り除けと説教したりするのは愚の骨頂です。多くの日本人にとって、仏壇についてとやかく言うのは、仏教と言う宗教に対する冒涜ではなく、自分の家族、親族、家系、血族に対する冒涜であり、自分のアイデンティティを否定されることなのです。だからこそ、普段は仏教に対してまったく関心を持っていない人物でも、仏壇に対して不敬なことを言おうものなら、烈火のように怒り出すのです。しかも、現在の日本のキリスト教では、仏壇の社会的機能に取って代わることができるものを、準備することも出来ません。

わたしたちはむしろ、仏壇を仏教的な色彩を帯びていながら、日本の社会の中で重要な役割を果たしているものと見て大切にすべきです。次男や三男の家族の中ならば、家族の大多数がクリスチャンになって、仏壇が不要になるまでは仏壇を大切にすべきです。長男の家に伝わる仏壇ならば、家族をはじめ、親族たちもクリスチャン信仰を認め、仏壇を要にした仏教行事の代わりに、日本人としてのアイデンティティを築くことができる場を作り、親族血族の絆を強くする機会を提供できるまで、仏壇を大切にするのがよいでしょう。

仏壇の中に悪霊が住んでいるというなら、そういうことを言う牧師や信徒の教会の講壇の中にも、なにもかも「悪霊、悪霊」と言わせて、悪霊のことで心を一杯にさせ、福音の本質から目をそらさせる悪霊が住んでいないか、良く良く調査することをお勧めします。